11）福原昌恵（2001）「幼児たちの『身体との出会い』」、『女子体育』第43巻第５号、pp22-24.
12）吉牟田美代子（2007）「遊びの中での育ち」、『女子体育』第49巻第１号、pp14-19.
13）前掲10）
14）熊谷宣子（2005）「遊ぶからだ　楽しみの発見」、『女子体育』第47巻第４号、pp14-19.
15）前掲12）
16）前掲８）
17）前掲14）
18）前掲10）
19）西洋子（2001）「保育者と身体性」、『保育学研究』第39巻第1号、pp12-19.
20）下釜綾子（2013）「身体表現活動におけるオノマトペを用いた動きとイメージ」、長崎女子短期大学紀要第37号、pp78-83.
21）小川鮎子、下釜綾子、高原和子、瀧信子、矢野咲子（2013）「幼児の身体表現活動を引き出す言葉かけ―オノマトペを用いた動きとイメージ」、佐賀女子短期大学研究紀要第47号、pp103-116.
22）渡邊孝枝・岡千春・鈴木瑛貴・柴眞理子（2014）「幼児の身体表現活動における擬音語・擬態語の活用―フレーズに着目して―」、十文字学園女子大学人間生活学部紀要第12巻、pp1-12.
23）井中あけみ・髙橋うらら（2019）「音楽」から考える子どもの自発的身体表現活動―保育者の視点を踏まえて―」、豊橋創造大学短期大学部研究紀要第36号、pp1-18.
24）髙野牧子（2018）「幼児と母親への「もの」を使った身体表現の実践的研究」、日本女子体育連盟学術研究第34号、pp31-38.

◆研究論文を募集します◆

― ピアレビュー（査読）の上、掲載します ―

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。
【テーマ】 子ども、保育、幼児教育に関するもの
【文字数等】 本文：400字詰め原稿用紙35枚程度（写真・図表、文献、注を含む）。本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。
【締め切り】 随時募集します。
【送付先】 本誌編集委員会　Mail:youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

にするオノマトペを中心とした言葉と動きやイメージの関係[20)21)]、保育者の発話の仕方[22)]、音楽[23)]や「もの」[24)]との関わりなども多く研究されている。

以上から、これまでに蓄積されてきた身体表現活動の研究や『女子体育』で報告された幼児期の多様な身体表現活動の報告と、遊びにおける子どもの身体表現を照らし合わせることで、子どもの自発的な遊びにおける身体表現を育む環境や保育者の援助、保育者の在り方を見いだしていくことも可能であると考える。そのためにも、子どもたちの自発的な遊びにおいて身体表現をどのように捉えるかを、まず明らかにしていく必要がある。本論で取り上げた表現対象になりきる身体や音や声に反応し表現する身体以外にどのように身体表現を捉えることができるか、子どもたちの自発的な遊びの中から捉えていくことを今後の課題としたい。

注

1）門脇早聴子（2017）「保育における身体表現活動の変遷に関する研究（1）保育要領、幼稚園教育要領を踏まえて―」、園田学園女子大学論文集、第51号、p105.
2）柴眞理子編（2018）『臨床舞踊学への誘い　身体表現の力』、ミネルヴァ書房、p19.
3）古市久子（1995）「幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察」、エデュケア（16）、pp19-25.
4）前掲1）
5）長野真弓（2011）、「幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案」、心理社会的支援研究（1）、pp29-34.
6）新山順子・髙橋敏之（2014）「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題」、兵庫教育大学教育実践学論集、第15号、pp79-87.
7）中村恭子（2009）、「中学校ダンスの男女必修化の課題―中学校教員を対象とした調査にもとづいて―」、順天堂スポーツ健康科学研究第1巻第1号（通巻13号）、pp27-39.
8）香曽我部琢（2016）、「遊びにおける幼児の身体の動きと音による二重の相互作用」、『女子体育』第58巻6・7号、pp16-21.
9）幼稚園教育要領「総則」第1「幼稚園教育の基本」には、「幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努める」とある。
10）伊集院理子（2004）「心のままに動くからだを求めて」、『女子体育』第46巻第6号、pp14-19.

動き、表現していったかについて豊かに描き出されている。特に、2004年度の「心のままに動くからだを求めて」[10]では、「からだ」の安定を基盤に、「もの」「ことば」「ともだち」との関わりによって子どもたちが心のままに動きだし、表現している様子が考察されており、環境と保育者の援助についてすでに検討がなされている。

さらに、８件あった「遊び」における身体表現の報告はすべて年齢別に報告されており、特に変身する、何かになりきる、という身体の報告は多くみられた。何かになりきるとき、３歳児は保育者に見てほしい気持ちが強く身体表現への意識が続かない様子[11]、年中児へのあこがれから年中児の運動会での踊りを真似たり[12]、年長児の作った衣装を借りて踊りを楽しむ様子[13]などが報告されている。４歳児では、お面や剣など「もの」に支えられてなりきり、動きが力強くなる様子[14][15]、５歳児では、音や友だちとの関わりの深まりによって身体の動きや表現が深化する様子[16]が報告されている。３歳、４歳、５歳の遊びの様子によって表現対象へのなりきり方、表現への没入の様子に違いがあることがわかる。なりきる姿、変身する姿以外にも、音や声に反応して動く身体[17]、友だちの動きに反応して動く身体[18]も報告されている。このように、年齢に応じた遊びの様子、そして「もの」「ことば」「ともだち」など、遊びの中で身体表現を誘発する要素を丁寧に拾い上げ、幼児期の身体表現を育む環境と保育者の援助や保育者の在り方を考えていくことこそ、今後の幼児期の教育における身体表現を育む視点として大切なことだと考える。

６．これからの身体表現の課題とまとめ

19年間分の『女子体育』における幼児期の身体表現の実践報告を通して、子どもたちの自発的な活動としての遊びの中で身体表現を育む環境や保育者の援助、保育者の在り方を考えていくことがこれからの身体表現の課題であると述べた。

そして、『女子体育』での子どもたちの自発的な遊びにおける身体表現の報告の中に、子どもの年齢に応じた遊びの変化や身体表現への没入の仕方、環境の要素といった、子どもたちの自発的な遊びにおける身体表現を育む視点を見いだすことができた。

さらに、保育者の在り方に関しては、からだまるごとで子どもを受け止め、理解する保育者の身体性を、身体表現活動によって育むことができることは報告されている[19]。また、今まで積み重ねられてきた身体表現活動で、身体表現を豊か

さらに、上記の３つの分類、「遊び」「活動」「遊びと活動の連続」を時系列で見ていくと、「2008年度」が一つの区切りになることがわかる。2000年度～2007年度までの実践報告には、「遊び」の報告が７件、「遊びと活動の連続」の報告が４件あるのに対して、2009年度～2019年度までの報告には「遊び」についての報告が１件、「遊びと活動の連続」に関する報告は０件、それ以外は「活動」に関する報告なのである。2011年度以後は隔月発行となったため報告数の減少は当然であるものの、「遊び」の報告が少なくなったのは何故なのであろうか。

2008年の学習指導要領の改訂時、中学校の保健体育において武道・ダンスを含めたすべての領域が必修となった際、ダンスの必修化が社会的な注目を集めた。中学校教員にとっても、他のスポーツと違い到達目標が一定でなく評価が難しいこと、指導経験が無く指導に自信が無いことなどから[7]、どうすればダンスの指導ができるのか、という指導方法に強い関心が集まった。中学校におけるダンスの必修化は身体表現・ダンスの専門家にとっても大きな節目であり、『女子体育』を発行している女子体育連盟は身体表現やダンス指導の中心的な立場を担っている。その流れが、多様な身体表現活動の展開という形で幼児教育においても現れ、活動の報告が多くを占めるようになったと考えられる。

５．幼児期の身体表現活動から、遊びにおける身体表現の育みへ

2009年度以降、唯一の「遊び」に関する報告は、2016年度６・７月号に掲載された「遊びにおける幼児の身体の動きと音による二重の相互作用」[8]という報告である。ここでは、パッケージ化された身体表現活動に疑問を呈し、自発的な遊びの観察を通した子どもたちの社会情動的スキルと動きのバリエーションの豊かさが提示されている。その上で香曽我部は、遊びの中で幼児たちが自発的に身体を表現できるような環境構成や援助が保育者に求められている専門性の力量であることへのパラダイム転換の必要性を提言している。

香曽我部が指摘する、子どもが自発的に身体を表現できるような環境構成や援助こそ、遊びを通して学ぶことが根本となる幼児教育の課題であることは、2018年告示の幼稚園教育要領「総則」第１「幼稚園教育の基本」[9]に照らすと重要であるにも関わらず、先に取り上げた保育における身体表現の課題を洗い出した先行研究において、遊びにおける環境構成や援助の課題を見いだすことができない。一方で、2008年度以前の『女子体育』では、「遊び」における身体表現の報告が７件あり、子どもたちの身体が遊びの中でどのように環境に能動的に関わり、

これら29件を、「遊び」：子どもたちの自発的な活動としての遊びにおける身体表現、「活動」：身体表現活動、「遊びと活動の連続」：自発的な活動としての遊びとの連続を意識した身体表現活動という３つに分類すると、「遊び」は８件、「活動」は17件、「遊びと活動の連続」は４件であった。

まず、17件と一番報告の多かった「活動」、つまり身体表現活動についての報告では、歌や絵本、遠足などの行事、虫や動物などの身近な自然、変身など遊びで興味のあること、動きそのものといった子どもたちの生活や遊びに身近な題材を選定していた。遠足での経験や作品展で作った作品を身体表現活動にしたり、子どもたちそれぞれの想像で次の展開を生み出していけるような絵本を選定したり、子どもたちの興味や経験を大切にした身体表現活動の工夫が見られた。さらに、実際の身体表現活動の展開では、一人一人が多様な動きと表現を工夫できるよう、言葉かけや装飾、音楽、そして保育者自身が動きの工夫をしていることがわかった。また、保育者が示した流れで進行するだけではなく、子どもたちの想像によってストーリーが変わっていく、テーマだけを設定し子どもの発想に応じて即興的に身体表現活動を創り上げていくといった身体表現活動の報告もあった。

次に、８件の報告があった「遊び」、つまり子どもたちの自発的な活動としての遊びにおける身体表現に関する報告では、ヒーローやお姫様に変身する姿、大好きなブロックに身体が同化する姿、ごっこ遊びでなりきる姿、楽器や声、音に応じて動き表現する様子などが年齢別に報告されていた。それらの報告の中で、子どもたちの遊びにおける身体表現は、動きの多様さ、生活や作ったものからイメージを広げ、イメージの世界で遊ぶこと、音を聞いて動きで表現することなどとして捉えられていた。さらに、食事や排泄に関わる生理的身体、緊張した身体、思い通りにならず奇声を上げる姿といった、身体は語るという「身体表現」の側面が遊びにおいて表出されていること、さらに子どもそれぞれが熱中できる遊びを見つけ、自分を表現していくことや葛藤を通して、子ども自身の身体表現が変化していく様子も報告されていた。

最後に４件の報告があった「遊びと活動の連続」、つまり自発的な活動としての遊びとの連続を意識した身体表現活動については、秋を探しに行った山で見つけた葉や木の実に、山の中でなりきる活動や、音楽を流すと踊りだす子どもたちの姿から徐々に友だちを増やして踊ることを提案し活動へとつなげていく様子などの報告があった。

表 1-5：2000 年度～2001 年度の『女子体育』に掲載された身体表現の実践

年	NO.	月	ページ	トピックス	タイトル	属性	幼稚園・こども園	年齢	活動・遊び	活動時の題材	遊びにおける身体表現	概要
2001	23	4	26・39	授業研究・内容と指導	幼児の表現指導上におけるコミュニケーションの取り方	保育者	幼稚園	記載なし	活動	絵本（「不思議の国のアリス」）		・学習発表会に向けて、絵本選びから始まりダンス創作など、子どもたちが中心となって劇遊びを作り上げていく過程と保育者の援助について
	24	5	22・24	授業研究・内容と指導	幼児たちの「身体との出会い」	研究者	幼稚園	3・5	遊び		3歳：「ごっこ遊び」で何かになりきる「ふり」は、長続きしない：身体を意識しない 5歳：運動遊びでの身のこなしから、身体への意識を集中的に持続させている	・遊びの中での子どもの身体の動きと表現の中で、特に子ども自身の身体への意識の違いを3歳と5歳を比べて述べている ・遊びの中で多様な身体の動きと表現をもたらすためには、保育者の力量に負うところが大きいと述べられている
	25	6	24・27	授業研究・内容と指導	動きあそびからイメージを―「川をジャンプ」を題材にして―	研究者	幼稚園	記載なし	活動	装飾（ビニールテープ）		・床にビニールテープを２本敷き、それを跳び越える活動からイメージが多様に広がる事例を取り上げ、動きがいいメージを生み、イメージが動きを生む循環が一人一人の身体表現を育む
	26	3	20・23	授業研究・内容と指導	動きの表現を支えるもの	保育者	幼稚園	4	遊び		カップに入った石の「音」から、海、汽車とイメージを広げなりきる	・カップに入った石の「音」から、海、汽車とイメージを広げなりきるように、子どもたちの遊びの中に動きや表現が生まれる要素が多分に含まれている。子どもたちが夢中になって遊ぶ中に保育者の意図的な働きかけに生かしていくヒントが含まれている
2000	27	4	24・27	授業研究・内容と指導	子どもたちの「生きる力」を育む	保育者	幼稚園	3	遊び		思い通りにならず奇声を上げる、一つの遊びに集中しない子どもたちの様子が園生活を通して変容する様子	・３人の子どもの育ちを、子どもたちの持つ育ちの背景も理解しながら、どうして遊びにおいてそのような行動＝表現に出ているのかを考察し受け止めながら、遊びの変化を追い、生きる力について考察をしている
	28	1	24・27	授業研究・内容と指導	"日常的に"と"タイムリーさ"を大切に	保育者	幼稚園	3・5	活動	行事等		※体育遊びの時間での活動報告 生活と密着した表現活動をするために、表現の時間を特別に設けるのではなく、多様な場面で表現遊びを取り入れ、また行事などタイムリーな話題を表現遊びの題材とし、多様な場面で表現遊びを取り入れていきたい
	29	2	25・28	授業研究・内容と指導	幼児理解と評価を考える	保育者	幼稚園	5	活動	生活発表会		※わくわく発表会という生活発表会のステージ報告 子どもたちそれぞれがやりたいことを伝え、その場面を取り入れながらわくわく発表会を構成する。わくわく発表会を通して、子どもたちがどのように成長していったか、その評価について

表 1-4：2002 年度～ 2004 年度の『女子体育』に掲載された身体表現の実践

年	NO.	月	ページ	トピックス	タイトル	属性	幼稚園・こども園	年齢	活動・遊び	活動時の題材	遊びにおける身体表現	概要
2004	16	6	14・19	体育授業研究	心のままに動くからだを求めて	保育者	幼稚園	3	遊び		・居場所があることで、安心し動きだす ・歌と友だちの動きに触発され、動く ・屡ミノ・ドレスに見立てた布でなりきる	・「からだ」を基盤において、「からだ」「もの」「ことば」「ともだち」という４つの視点をもって幼稚園の生活の中で展開する「関わり」を捉え、構造化する⇒「からだ」の安定があり、「もの」、「ともだち」、「ことば」の世界が広がり、「動くからだ」を導いていく。３歳児の動くからだをもたらす園生活の報告 ・安定しやすい居場所を作る…力の入ったからだが自発的に動き、ほぐれていく・多様な動きを生み出せる ・友だちとのふれあい…「おつかいありさん」の歌で、蟻の動きをする友だちに触発され、楽しさが引き出される ・モノを身につけて、なりきる…５歳児が作った屡ミノを借りて毎日踊り、お姫様のドレスに見立てた布を着て音楽を流して踊る。ものと音楽が踊るからだを生み出す
	17	1	34・37	表現・ダンス授業研究	秋見つけ―自然を感じるしなやかな心―	保育者	幼稚園	5	遊びと活動の連続	自然		・体育遊びにおける表現遊び ・子どもたちが大好きな「お山」で繰り広げた「秋見つけ」の表現遊び報告 ・お山の中で見つけた秋（紅葉した葉っぱや小さな木の実、虫の卵がついた葉っぱなど）に、変身し変わっていく様子を表現する
	18	2	14・19	体育授業研究	心も体も弾んでいこう	保育者	幼稚園	4	活動	生活（散歩、花火、遊園地）		・歌を歌いながら何かになりきる子どもの姿から、身体表現活動を展開した事例報告 ・子どもたちとともにお話を作りながら、動物になったり変身したりしてお散歩に行き、花火や遊園地の表現をしたことと子どもの姿 ・子どもが実際に体験したことから、自分なりの動きや表現の楽しさを味わってほしいという保育者の願いがあった
2003	19	5	10・15	体育授業研究	子どもの中から生まれるリズム	研究者	幼稚園	5	活動	歌（どんぐりころころ）		・どんぐりころころを題材として、ピアノの音と子どもたちから発せられる動きのリズムである擬態語の両方のリズムに着目した身体表現活動の報告 ・子どもたちが自然に発する擬態語は動きを支えるリズム ・ピアノ音の高低で動きが変わる ・ピアノ音と擬態語の複合で子どもたちがリズムを生み出す場面もあり、動きの共振が見られた
2002	20	4	24・27	授業研究・内容と指導	友達との関わりの中で響き合う保育	保育者	幼稚園	3・4・5	遊びと活動の連続			・自然とかかわる保育の中で体験したことを運動会の表現遊び（リズム作品）としてまとめることや、毎日のごっこ遊びからお芝居を作り上げたことの報告
	21	10	23・25	授業研究・内容と指導	子どもとのかかわりのなかで	研究者	幼稚園	5	活動	多様なモチーフ（新聞紙、風船、磁石遊び、だるまさんが転んだ、など）		・月に１度程度身体表現の専門家が行う表現遊びの中から、保育者と子ども、子ども同士の関わりに関して、関わりが広がった、または停滞したことの報告 ・保育者と子どもの関わりだけでなく、子どもと子どもの関わりに広がると遊びが白熱したものになる ・指導者の言葉かけにも、共感型と指導型があり、その使い分けの必要性を述べている
	22	1	24・27	授業研究・内容と指導	かかわりあうということ	保育者	幼稚園	3	遊び		生理的身体（食事や排泄）に抱える困難がごっこ遊びで具体化され、消化されていく様子	・子どもの身体を食事や排泄という角度から捉え、遊びの中で展開されたごっこ遊びと子どもの身体の関わりについての考察 ・自分が抱えている困難を具体化して伝えてくることがあり、この回転寿司ごっこでもその困難を伝えつつ、教諭が遊びの中で無意識に近いところでその困難を消化した ・おとなの役割と子どもたちとの関わりに、互いの呼吸を感じることが大切であると述べられている

表 1-3：2005 年度～ 2007 年度の『女子体育』に掲載された身体表現の実践

年	NO.	月	ページ	トピックス	タイトル	属性	幼稚園・こども園	年齢	活動・遊び	活動時の題材	遊びにおける身体表現	概要
2007	12	4	14・19	表現・ダンス授業研究	子どもと一緒に動きを楽しんで表現しよう！	保育者	幼稚園	3	遊びと活動の連続			・音楽を流すと踊り出す子どもたちの様子から、徐々に友だちと一緒に踊ることを提案する ・電車ごっこをしていた姿から、バスごっこの遊びを取り入れる ⇒このように遊びでの子どもの身体表現を捉えながら、子どもたちの興味を見極め、生活発表会での表現を創り上げて行くまでの報告
2006	13	1	14・19	表現・ダンス授業研究	遊びの中での育ち	研究者と保育者	幼稚園	3・4・5	遊び		3歳：「あこがれ」から真似る（運動会での4歳児にあこがれ、真似て踊る） 4歳：「もの」でなりきる（お面（動物・おばけ・ヒーロー）をつけてなりきる／シャツ・ネクタイ・キュロットを着てお父さんになりきる）	3歳：年中組が運動会で練習する姿にあこがれ、遊びの中で年中組の再現をする ⇒これらの遊びの事例から、子どもたちが心地よい居場所を見つけ、楽しい体験を繰り返し、自分の力を発揮していくことの総括 4歳：生活との関わりや、作ったものからイメージを広げ、イメージの世界で遊ぶことを楽しむ／遊具を独り占めすると友だちが離れていき、交代すると友だちも関わって遊ぶことができることを運動会で制作した遊具を通して学ぶ
2005	14	4	14・19	体育授業研究	遊ぶからだ楽しみの発見	保育者	幼稚園	3・4・5	遊び		3歳：「大好きなもの」になる（ブロックになる） 「言葉」「音」に反応し動く 4歳：「もの」でなりきる（お面とマントでなりきる） 5歳：遊びにおける身体表現の報告はなし	＜遊びの中での姿＞ ・3歳：ブロックで作ったものを飛ばすような動きをしているうちに、ブロックの形になっちゃった、とからだでなりきる／自分の発した音や言葉で、友だちと同じ動きをして遊ぶ ・4歳：変身用のお面とマントで動きが力強くなる ＜活動の中での姿＞ ・4歳：親子で飛行機遊びを繰り返し楽しむ／大好きな音楽でダンス遊び ・5歳：だるまさんが転んだ／コマ回し 遊びの中で、また活動の中で多様な遊ぶからだと楽しみを発見している子どもの様子の報告
	15	1	14・19	体育授業研究	子どもから引き出す音、動き	研究者	幼稚園	5	遊びと活動の連続			・子どもたちの遊びから始まり、保育者に「やらされている」という受け身の活動にならないように表現性を高めた「ステージフェスティバル」に向けた作品創作 ・音楽は子どもたちの即興演奏を録音、舞台美術はにじみ絵遊びから ・「友だちと一緒に遊んでいたら、身体表現活動になっていた」ことを目指す①自分の身体を見つける②周りとのコミュニケーションを広げる③身体の動きのバリエーションを増やす④表現性を高める、という実践を通した表現とコミュニケーション能力の相関性、子どもの身体が持つ芸術性について

表 1-2：2008 年度～ 2012 年度の『女子体育』に掲載された身体表現の実践

年	NO.	月	ページ	トピックス	タイトル	属性	幼稚園・こども園	年齢	活動・遊び	活動時の題材	遊びにおける身体表現	概要
2012	6	12・1	16・21	表現・ダンス実践研究	からだ遊びのアプローチ	保育者	幼稚園	記載なし	活動	装飾(足跡マーク)本(からだブック)		・「からだ遊びのアプローチ」の実践報告 ①「コピー＆クリアー」「集合」「ライン」「ついてきて」…保育者や友だちの動きの真似をしたり、保育者のポーズを見て自分のポーズを決める、といった即興的な活動 ②「だれの足あと？」…足跡マークをもとにした、ケンケンパ遊び ③「関節を利用して」…からだブックに載っている体の部位を意識し、ホネホネマンになる
2011	7	6・7	38・43	表現・ダンス実践研究	表現遊び「お菓子のお城」	保育者	幼稚園	4	活動	行事(作品展)		・「運動遊びの時間」内の表現遊びの報告 ・園行事である作品展において、年中児全員で作った「お菓子のお城」と、一人一人が作った「びっくりケーキ」を題材とする ・保育者の指導のもと、びっくりケーキでは飛び出す「びっくり君」になる様子をそれぞれが工夫し、お菓子のお城は３人組で工夫した
2011年度より2か月に１回の発行、2010年度までは月１回の発行。												
2010	8	6	14・19	表現・ダンス授業研究	ミクロな目とマクロな目で関わる表現遊び	保育者	幼稚園	3	活動	生活(動物、虫、身近な生き物、運動)		・月に２～３回、１回20分程度のリズム表現遊びにおける３歳児の１年間の変化や成長についての報告。特に「自分のイメージでさまざまな表現を楽しむ」という活動について ・子ども一人一人に寄り添うことと、全体の活動の進行を見つめる二つの視点を述べつつ、１年間で子どもたちがより自分らしい表現ができるようになった成長の報告
	9	3	14・19	表現・ダンス授業研究	身体表現活動「クリエイティブ・ムーブメント」	保育者	幼稚園	3・4・5	活動	毎月テーマが異なる。動きを中心としたものから創造的なテーマへ		・20分程度の活動、月に１度。毎月テーマを変えて行う ・欧米で取り上げられているクリエイティブ・ムーブメントの導入の様子を報告 ・必要最低限の言葉かけしかしないことが大切であり、子どもたちそれぞれが多様な動きを生み出しながら、子ども同士、子どもと保育者のコミュニケーションづくりの場となっている
2009	10	9	14・19	表現・ダンス授業研究	“わくわく”タイムでしなやかな体づくり	保育者	幼稚園	3・4・5	活動	動き		・子どもたちの運動能力の低下から、身体づくりをする場である“わくわく”タイムを設けたことと、１年間の実践報告 ①ゆったりとしたペースで、個の動きを大切にする②多様な動きを経験する③子どもの動きや様子を把握し、その経験をクラス全体での保育に生かす、というねらい ・動きについての観察表をつくり、子どもたちのできる動きを“わくわく”タイムで増やしながら、動くことができ、楽しくなると心も動き、表現へも繋がっていった
	11	2	14・19	表現・ダンス授業研究	保育者も育つ「身体表現遊び」	研究者	幼稚園	3・4	活動	生活(動き、虫、変身)		表現遊びに苦手意識を持つ保育者の、２～４年目までの保育実践観察の報告（２年目・伸びる―縮む　３年目・変身ごっこ　４年目・だんごむし） ・問いかけの言葉が減り、子どもの姿を認める言葉かけが増えている ・子どもたちの日常の姿と身体表現遊びのつながりを実感しながら身体表現遊びを繰り返すことで、保育者としてのやわらかなからだ、そして保育全般における育ちに繋がっていった
2008年度は、子育て支援事業の報告												

表 1-1：2013 年度～ 2018 年度の『女子体育』に掲載された身体表現の実践

年	NO.	月	ページ	トピックス	タイトル	属性	幼稚園・こども園	年齢	活動・遊び	活動時の題材	遊びにおける身体表現	概要
2018	1	12・1	16・21	表現・ダンス実践研究	芋ほり遠足で事件発生!!	保育者	こども園	記載なし	活動	行事（芋ほり遠足）		・体育遊びの時間の身体表現遊びの報告 ・子どもたちの興味が湧き、想像が広がる題材の検討⇒行事を振り返り、芋ほり遠足を題材に ・芋ほり遠足を題材とした表現遊びの指導の流れと子どもたちの様子についての報告
2017	2	4・5	34・39	表現・ダンス実践研究	だるまさんになって遊ぼう	保育者	幼稚園	3・4	活動	絵本（「だるまさんがころんだ」）		・絵本「だるまさんがころんだ」からどのような身体表現遊びが展開できるか、だるまさんカードを工夫した活動の紹介 ・年少児：①絵本の擬音語・擬態語による動きの工夫②だるまさんになりきり、いろいろな運動遊具で遊んだことの報告 ・年中児：だるまさんカードで動きのポイントを提示し、保育者や子どもたちの考えた動きの真似を楽しむ報告
	3	12・1	16・21	表現・ダンス実践研究	幼児と楽しい表現遊び	保育者	幼稚園	3・4・5	活動	絵本（「だるまさんがころんだ」）		・絵本「だるまさんがころんだ」を題材にした表現遊びや歌遊びを題材にした表現遊びの紹介 ①読んでいるだけで子どもの身体が動く⇒子どもの想像で多様なだるまさんが出現し、ポーズや動きを見つける ②絵本に出てくる擬音語・擬態語を変える ③「我は大蛇」「大工のキツツキさん」を工夫した表現遊び
2016	4	6・7	16・21	表現・ダンス実践研究	遊びにおける幼児の身体の動きと音による二重の相互作用	研究者	幼稚園	3・5	遊び		・友だちの「音」（楽器遊び）に反応して踊る ・ヒーローになりきる（ごっこ遊び）	・パッケージ化された身体表現活動に対する疑問と、幼児期の身体表現における「社会情動的スキル」とは何かという問い ⇒オルフ楽器遊びと身体表現の即興という、子どもたちの自発的な遊びを分析した結果、身体表現における社会情動的スキルは表現を通して他者と積極的に相互作用する力や相手の表現に敏感に反応する力であることを示唆。 ⇒上記二つの力はごっこ遊びにも見られ、パッケージ化された身体表現活動よりもごっこ遊びの方が動きのバリエーションが豊富であることを示唆。 以上から、遊びの中で幼児たちが自発的に身体を表現できるような環境構成や援助が保育者に求められている専門性の力量であることへのパラダイム転換の必要性を提言
2015年度は、「表現・ダンス実践研究」における幼稚園の実践報告はなし												
2014年度は、地域と保育所での実践報告												
2013	5	12・1	16・21	表現・ダンス実践研究	子どもの自由な身体表現を育むために	研究者	幼稚園	異年齢	活動	モチーフ（動物）		※預かり保育での実施 ・テーマだけを決め、子どもの想像により展開していく表現活動の実践報告 ・まとまりのないように見える活動の中に、次々と表現が生み出され、その表現から次の表現が生み出される ・ありのままを受け止め、生かす実践を試みることの意義についての報告

としている。具体的には、舞踊教育や保育で着目される即興性や保育者の身体に関する研究を進め、保育者養成カリキュラムを明確化し、幼児教育の実際と保育者養成が乖離しない保育者養成における身体表現教育を構築することである。

保育における身体表現の捉えが曖昧であるという課題は、領域「表現」が誕生して30年経過してもなお残るものの、幼児期の身体表現活動における研究では、身体表現活動の意義や指導の工夫に関して数多くなされていることがわかる。また、舞踊教育や保育で着目される即興性、つまり刻々と変わる状況に即時的に対応する身体に関しては、子どもとの関わり合いにおいて必要となることから、保育者養成においては身体表現活動を通して育むべき課題であることがわかる。

4.『女子体育』に掲載された身体表現の実践報告

上記3では、保育における身体表現を対象とした研究を総括した論文を取り上げたのだが、次に幼稚園における実践報告から、保育における身体表現の実際を捉えたい。

実践報告は、2000年4月～2019年3月の『女子体育』に掲載された、「表現・ダンス実践研究」「表現・ダンス授業研究」「体育授業研究」「授業研究・内容と指導」というトピックスにおける幼稚園での身体表現の実践を取り上げる。保育所、子育て支援事業での報告もあったが、本稿では除いている。『女子体育』を選定した理由は、保育所・幼稚園から大学、地域や生涯学習での身体表現やダンスの実践、教育、研究を牽引する公益社団法人女子体育連盟の機関誌であること、現在は隔月での発行であるが、2011年4月以前は毎月発行され、全国の身体表現やダンスの実践報告を継続的に取り上げていることからである。2000年4月～2019年3月の『女子体育』に掲載された幼稚園における身体表現の実践に関する報告は29件である。詳細は次の表のとおりである。

2．身体表現について

身体表現には、「本人の意識とは別にからだを発信基地として何らかのメッセージが伝わる（伝わってしまう）ような側面（からだは語る）と、伝えたいメッセージが意識的な身体動作として表現され伝えられるような側面（からだで語る）」[2)]があるため、本稿では前者（からだは語る）を「身体表現」と記載し、後者（からだで語る）のうち、身振り言語や他の表現行動に付随する身体表現等を除き、身体や身体の動きで表現することを目的とした活動を身体表現活動としたい。また、身体表現と表記する場合は、「身体表現」と身体表現活動、身振り言語等すべての身体表現を包括するものとする。

3．保育における身体表現の課題を捉えた先行研究からわかること

保育における身体表現の課題を捉えた先行研究では、身体表現の捉えに関する課題、実践研究における課題、保育者養成における課題が挙げられている。

身体表現の捉えに関して、平成元年の幼稚園教育要領施行５年後に発表された古市[3)]の論文では、身体表現の多様な側面が整理されていないために、身体表現における問題の焦点が間違ってしまうことを指摘し、身体表現の側面を整理、検証している。このように、平成元年の幼稚園教育要領施行後に身体表現の持つ曖昧さは議論に上がっていたが、施行から約30年が経過した2017年に発表された門脇[4)]の論文においても、いまだに身体表現の捉え方が曖昧であると指摘されている。門脇はさらに身体表現の捉えの曖昧さゆえに、保育者は身体表現の内容や展開に難しさを感じていること、自発的に行う身体表現を保育者がどのように援助するのかイメージできないことを論じている。

身体表現活動の実践研究に関して、長野[5)]は国立情報学研究所論文情報ナビゲーターを使用し幼児・身体表現というキーワードをもとに国内の研究報告を検索し、51件の論文と報告書の内容を整理した上で二つの課題を指摘している。一つ目は、保育者それぞれの事例研究が多くを占めており、保育現場や教育内容の改善に向けて客観的に捉える視点が必要であること、二つ目は身体表現活動の効果や重要性を主観的に捉えた研究が多いことから、客観的視点での身体表現活動の成果を検証する必要があることである。

保育者養成における課題に関して、新山・髙橋[6)]は、身体表現活動における幼児と保育者の関わりについては援助や評価の指標を求めた研究が蓄積されていると評価したものの、保育者養成における授業研究は少なく、今後の必要性を課題

論文

幼児期の教育における身体表現の課題
―『女子体育』誌（2000年４月号～2019年３月号）に掲載された実践報告を通して ―

渡邊　孝枝*

The issue of body expression in early childhood capturing from reports of "JOSHI TAIIKU", the official magazine of Japan Association of Physical Education for Women.

Takae WATANABE

１．はじめに

1989（平成元）年に幼稚園教育要領が改訂され、感性と表現を育む領域「表現」が誕生し、一つの時代が終わった。領域「表現」が誕生してから、子どもの身体による表現、つまり身体表現は、どのように理解され、幼児期の教育において育まれてきたのであろうか。

平成元年の幼稚園教育要領改訂において大きく見直されたことは、幼児期における教科教育的な保育からの脱却であろう。平成元年以前、身体表現は「音楽リズム」の中の「動きの表現」として位置付いており、子どもそれぞれが主体として、創造的な表現を育むことにねらいがあったものの、その内容は「リズミカルな動きをさせるといった、保育者の指導目標に重点をおいた」[1)]ものとなっていた。このような保育者主導の活動を見直し、子どもの表現は遊びや生活の中に立ち現れ、総合的に感性や表現、創造性を育むもの、として誕生したのが領域「表現」なのである。身体表現は、領域「表現」が誕生して30年たった今、以前の教科教育的な視点を脱却した、子どもの身体による感性や表現、創造性の育みができているのであろうか。本稿では、2000年４月号～2019年３月号の『女子体育』に掲載された実践報告から幼稚園における身体表現の実際を捉えることを通して、これからの保育における身体表現の課題を見いだすことを目的とする。

＊（わたなべ たかえ）十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科。